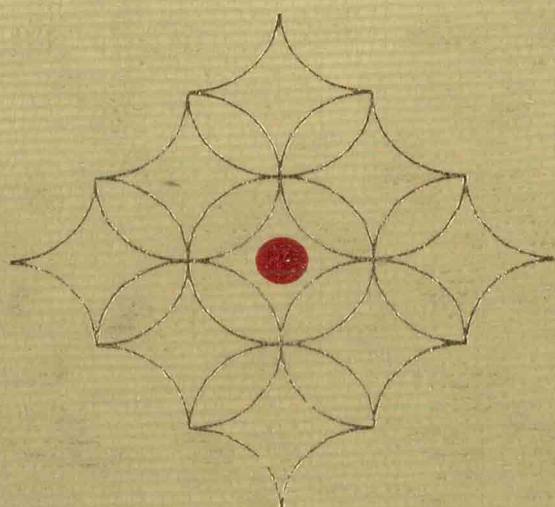




現代日本文學大系

24

永井荷風集(二)



筑摩書房

現代日本文學大系 24

昭和四十六年十二月十五日 初版第一刷発行
昭和四十八年九月一日 初版第二刷発行

永井荷風集

著者 永井荷風
発行者 永井達三

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷 株式会社 精興社
製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0393 (製品) 10024 (出版社) 4604

永井荷風集(二) 目次

巻頭写真
筆蹟

つゆのあとさき

ひかげの花

溼東綺譚

勲章

踊子

問はずがたり

来訪者

にぎり飯

三

四

五

一六

二三

二四

二六

二五

裸体

二〇

老人

二七

自選荷風百句

三三

偏奇館吟草

三四

為永春水

四〇

雪の日

四〇

葛飾土産

四四

断腸亭日乗（抄）

二六

〔付録〕

「つゆのあとさき」を読む

谷崎潤一郎 三五

『澤東綺譚』を読む

佐藤春夫 三六

文人としての永井荷風

唐木順三 三六

永井荷風論

永井荷風

『断腸亭日乗』について

同居人荷風

江藤 淳 三三

桑原武夫 三〇

河盛好藏 三六

小西茂也 三三

永井荷風集
(二)

新賜亭日記

第二十九卷

昭和十九年^{二十}乙酉^{正月}起迄

谷風 散人年六十七

正月八日。曇り下風あり。兼氏四十三歳多き。十八日誌
も今午散市ありて二十九巻をけり。ぬ。感慨あり。く
却て筆を止し。午後柿屋に豊夫多夜具衣
類を信子知人の家に送り。多と款話あり。移し
昏暮に去り。此夜中夜多し。
一月二日。晴。すくす。洗湯に浴し。

つゆのあとさき

女給の君江は午後三時から其日は銀座通のカツフエーへ出ればよいので、市ヶ谷本村町の貸間からぶら／＼堀端を歩み見附外から乗つた乗合自動車を目比谷で下りた。そして鉄道線路のガードを前にして、場末の町へでも行つたやうな飲食店の旗ばかりが目につく横町へ曲り、貸事務所の硝子窓に周易判断金亀堂といふ金文字を掲げた売卜者をたづねた。

去年の暮あたりから、君江は再三気味のわるい事に遭遇つてゐたからである。同じカツフエーの女給二三人と歌舞伎座へ行つた帰り、シールのコートから揃ひの大島の羽織と小袖から長襦袢まで通して袂の先を切られたのが始まりで、その次には真珠入り本鼈甲のさし櫛をどこで抜かれたのか、知らぬ間に抜かれてゐたことがある。掏摸の仕業だと思へばそれまでの事であるが、又どうやら意趣ある者の悪戯ではないかといふ気がしたのは、其後猫の子の死んだのが貸間の押入に投入れてあつた事である。君江は此年月随分みだらな生活はして来たものの、然しそれほど人から怨を受けるやうな悪いことをした覚えは、どう考へて見てもない。初めは唯不思議だとばかり、さして気にも留めなかつたが、ついこの頃、街巷新聞といつて、重に銀座辺の飲食店やカツフエーの女の噂をかく余り性の好くない小新聞に、君江が今まで誰も知らう筈がないと思つてゐた事が出てゐたので、どうやら急に気味がわるくなつて、人に勧められるがまゝ、まづ卜占をみて貰はうと思つたのである。

街巷新聞に出てゐた記事は誹謗でも中傷でもない。寧ろ君江の容姿をはめたゝへた当り触りのない記事であるが、その中に君江さんの内腿には子供の時から黒子が一つあつた。これは成長してから浮気家業をするしるしださうだが、果してその通り、女給さんになつてから黒子はいつつの間にか増えて三つになつたので、君江さんは後援者が三人できゐるのだらうと、内心喜んだり気を揉んだりしてゐるといふ事が書いてあつた。君江はこれを読んだ時、何だか薄気味のわるい、誠にいやな心持がした。左の内腿に初めは一つであつた黒子がいつとなく並んで三つになつたのは決して虚誕でない。全くの事実である。自分でそれと心づいたのは去年の春上野池の端のカツフエーに始めて女給になつてから、暫くして後銀座へ移つたところである。それを知つてゐるのはまだ女給にならない前から今もつて関係の絶えない松崎と云ふ好色の老人と、上野のカツフエー以来兎や角人の噂に上る清岡進といふ文学者と、まづこの二人しかない筈である。黒子のある場所が他とはちがつて親兄弟でも知らう筈がない。風呂屋の番頭とてそこまでは気がつくまい。黒子の有無は別にどうでもよい事であるが、風呂屋の番頭さへ気のつかない事を、どうして新聞記者が知つてゐたのだらう。君江はこの不審と、去年からの疑惑とを思合せて、これから先どんな事が起るかも知れないと、急に空おそろしくなつて、今まで神信心は勿論、お御籤一本引いたことのない身ながら、突然占ひを見てもらふ氣になつたのである。

アパートメントの一室を店にしてゐる新時代の売卜者は年の頃四十前後、口髭を刈り洋服を着、鼈甲のロイド眼鏡をかけ、デスクに凭れて客に應對する様子は見たところ医者か弁護士と変りはない。省線電車の往復するのが能く見える硝子窓の上には「天祐平八郎書」とした額を掲げ、壁には日本と世界の地図とを貼り、机の傍の本箱には棚を殊にして洋書と映入の和本とが並べてある。

君江は薄地の肩掛を取つて手に持つたまゝ、指示された椅子に腰をかける、洋装の売卜者はデスクの上によみかけの書物を閉ぢ廻転椅

子のまゝぐるりと此方へ向直つて、

「御縁談ですか。それとも大体にお身の上の吉凶を見ませうか。」とわざとらしく笑顔をつくる。君江は伏目になつて、

「別に縁談といふわけでも御在ませむ。」

「では、まづ大体の事から拝見しませう。」と易者は恰も婦人科の医者が患者の容態をきくやうに、成りたけ気がねをさせまいと苦心するらしい砕けた言葉づかひになり、「占ひも見つけると面白いものと見えまして、いろ／＼なおお客様がお出になります。毎朝会社のお出かけにお寄りになつて、其日々々の吉凶を見る方もあります。然しむかしから當るも八卦、當らぬも八卦といふ事がありますから、凶の卦に当たつてもあまりお氣におかけなさらん方がよいです。お年はおいくつでいらつしやいます。」

「丁度で御在ます。」

「それでは子の年でいらつしやいますな。それからお生れになつたのは。」

「五月の三日。」

「子の五月三日。さやうですか。」と易者はすぐに筮竹を把つて口の中で何か呟きながらデスクの上に算本を並べ、「お年廻りは離中断の卦に当ります。併し文字通り易の釈義を申上げてても廻遠くて要領を得ない事になりませうから、わたくしの思ひついた事だけを手短に申上げて見ませう。大体を申上げると、この離中断の卦に当る方は男女に限らず親兄弟にはなれ友達も至つて少く一人で世を渡る傾きがあります。それにあなたのお生れになつた月日から見ますと、遊魂巽風の卦に当ります。これは一時お身の上に変つた事が起つても、その變つた事が追々元の形に立戻るといふ卦であります。この卦から考へて見ますと、現在のお身の上は一時變つた事の起つた後、追々もとのやうになつて行かうと云ふ間のやうに思はれます。天氣に譬へて申上げれば暴風のあつた後、その名残りがなか／＼静まらない。併し追々静になつて、やがてもとの天氣にならうといふその途中だと申したらよいで

せう。」

君江は膝の上に肩掛を弄びながらばんやり易者の顔を見てゐたが、その判断は全くその身に覚えがない事ではない。どこか當つてゐる処があるので、何となく氣まりのわるいやうな心持で再び伏目になつた。一時身の上に変つた事が在つたと言ふのは、大方両親の意見をきかず家を飛出し、東京へ来て、とう／＼女給になつた事だらうと思つたのである。

君江が家を出たわけは両親はじめ親類中挙つて是非にもと説き勧めた縁談を避けやうが爲めであつた。君江の生れた家は上野停車場から二時間ばかりで行かれる埼玉県下の丸九町に在つて、その土地の名物になつてゐる菓子をつくる店である。君江は小学校の友達の中で、一時牛込の芸者になり、一年たつたかゝぬ中身受をされて、人の妾になつてゐた京子といふ女と絶えず往来をしてゐたので、田舎者の女房などになる氣はなく、家を逃げ出して其のまゝ京子の家に厄介になつた。田舎から迎ひの人が来て、二三度連れ戻されても又すぐ飛出す始末。親達も困りぬいて、君江の我儘を通させ銀行か会社の事務員になる事を許した。

君江は京子の旦那になつてゐる川島といふ人の世話で、間もなく或保険会社に雇はれたものの、これは一時実家へ対しての申訳に過ぎないので、半年とはつづかず、その後はぶら／＼京子の家に遊んで日を暮してゐる中、突然京子の旦那は会社の金を遣込んだ事が露見して検事局へ送られる。京子は芸者に出てゐた頃のお客をそのまゝ妾宅へ引込み、それでも足りない時は知合ひの待合や結婚媒介所を歩き廻つて、結局何不自由もなく日を送つてゐるのを、傍で見てゐる君江もいつか之をよい事にして其の仲間にはいつた。然し何分にも其筋の検査がおそろしいので、京子はその芸者にならうと言出す。君江もとも／＼芸者はどんなものか一度はなつて見たいと思ひながら、鑑札を受ける時所轄の警察署から実家へ問合せの手續をする規定のある事を知つて、已むことを得ず女給になつた。

京子は田舎の家へ仕送りをしなければならぬ身であるが、君江はそんな必要がない。田舎に育つただけそれほど流行の物に身を飾る心もなければ、芝居や活動のやうな興行物も、人から誘はれないかぎり、自分から進んで見に行かうとはしない。小説だけは電車の中でも拾ひ読みをする程であるが、其の他には自分でも何が好きだかわからないと言つてゐる位で、結局貸間の代と髪結銭さへあれば、強ひて男から金など貰ふ必要がない。金などは貰はずに、随分男のいふまゝになつてやつた事もある程なので、君江は今までいかほど淫恣な生活をして来ても、人から左程怨を受けるやうな筈はないと思ひ込んでゐる。占者の説明を待つて、

「それでは今のところ別にたいして心配するやうなことはないんで御在ますね。」

「御健康はいかゞです。現在別に御わるいところがないのなら、無論近い将来にもさして病難があるとは思はれません。現在は唯今も申上げたやうに波瀾のあつた後むしろ無事で、いくら沈滞といふやうな形もあります。御自分ではお氣がつかないでいらつしやるかも知れませんが、何か知ら不安で、おちつかないやうな氣がなさるのかも知れません。然し易の卦では唯今申上げたやうに一時の変動が追々静まつて行くのですから、此れから先たいした事件が起らうとは思はれません。然し何か御心配な事があつて、その事をどうしたい、かと思召すなら、其の特別な事について、もう一度見直しませう。それで大抵お心当りがつくだらうと思ひます。」と易者は再び筮竹を取り上げた。「実はすこし氣にかゝる事が御在まして。」と君江は言ひかけたが、まさか黒子の事は明らかに言出しにくいので、「自分には別に覺がないんですけれど、誰かわたくしの事を誤解してゐる人があるのではないかと思ふやうな事が御在ます。」

「はい。はい。」と易者は仔細らしく眼を閉ぢて再び筮竹を数へ算木を置き直して、「成程。この卦は物に影の添ふ事を意味します。して見ると、何か御自分でいろ／＼思ひすこしをなさるのですな。それが

ため無い事も有るやうに思はれて来ます。唯今の言葉で申すと幻影と実体ですな。物があつて影の生ずるのが自然でありますが、時と場合には、それとは反対に影から物の起ることもあります。それ故まづ影をなくすやうになされば、自然と物事は落つく処へ落つて行くわけで。さういふ御心持でいらつしやれば、別に御心配には及ばないと思ひます。」

君江は易者のいふ事を至極尤^{もつとも}だと思ふと、自分ながらつまらない事を氣に掛けてゐたと、忽ち心丈夫な氣になつてしまつた。それでもまだ何やらきいて見たいやうな心持がしながら、然しあまり微細な事まで問掛けて、それがため現在の職業はまだしもの事、二三年前京子と二人で待合や媒介所を歩き廻つた事まで知られてはと、底氣味のわるい心持もする。猫の死骸や櫛のなくなつた事もきいて見やうとは心づきながら、カツフエーへ行く時間が氣になるので、今日はこのまゝ、立去らうと考へ、

「失礼ですが、御礼は。」といひながら帯の間へ手を入れ、「巷円いたゞく事にしてありますが、いかほどでも思召しで宜しいのです」

出入口の戸があいて、洋服の男が二人無遠慮に君江の腰をかけてゐるすぐ側の椅子に坐つたのみならず、其一人はぎよろりとした眼付の、どうやら刑事かとも思はれる様子に、君江は横を向いたまゝ椅子から立つて、易者にも挨拶せず、戸を明けて廊下へ出た。

建物を出ると、おもては五月はじめの晴れ渡つた日かげに、日比谷公園から堀端一帯の青葉が一層色あざやかに輝き、電車を待つ人だまりの中から流行の衣裳の翻へるのが目に立つて見える。腕時計に時間を見ながら、君江はガードの下を通りぬけて、数寄屋橋のたもとへ来かゝると、朝日新聞社を始め、をちこちの高い屋根の上から広告の輕氣球があがつてゐるので、立留る氣もなく立留つて空を見上げた時、後から君江さんと呼びながら馳け寄る草履の音。誰かと振返れば去年池の端のサロンラックで一結に働いてゐた松子といふ年は二十一二の

女で。その時分にくらべると着物も姿もずつと好くなつてゐる。君江は同じ経験からすぐに察して、

「松子さん。あなたも銀座。」

「えい。いゝえ。」と松子は暖味な返事をして、「去年の暮、暫くアルプスにゐたのよ。それから遊んでゐたの。だけれど又どこかへ出たいと思つて実はこれから五丁目のレーニンつていふ酒場。君江さんも御存じでせう。あの時分ラツクにゐた豊子さんが居るから、鳥渡様子を見て来やうと思つてゐるの。」

「さう。あなた、アルプスにゐたの。ちつとも知らなかつたわ。わたしはあれからずつとドンフワンにゐるわ。」

「此の春だつたか、アルプスでお客様から聞いたことがあつたわ。お逢ひしたいと思つてもつい時間がないでせう。あの、先生もお変りがなくなつて。」

君江は小説家清岡進の事にちがひないとは思ひながら、数の多いお客の中には、弁護士の先生もあれば、医者先生もあるもので、それとなく念を押すに若くはないと、「ええ。この頃は新聞の外に映画や何かで大変おもしろいやうだわ。」

松子は之を何と思ひちがひしたのか、「アラ、さう。」といかにも感到打たれたらしく深く息を呑んで、「男はいざとなると薄情ねえ。わたしもいゝ経験をしたのよ。だから今度は大に発展してやらうと思つてるのよ。」

君江は心の中で高が五人か十人、数の知れた男の事を大層らしく経験だの何だのと言ふにも及ぶまいと、可笑しくなつて来て、からかひ半分、わざと沈んだ調子になり、「あの先生には立派な奥様はあるし、スターで有名な玲子さんがあるし、わたし見たやうな女給なんぞは全く一時的の慰み物だわ。」

橋を渡ると、人通りは尾張町へ近くなるに従つて次第に賑かになる。それにも係らず松子は正直な女と見えて、忽激した調子になり、「だつて、玲子さんが結婚したのは、先生が君江さんを愛した為だつてい

ふ評判よ。さうぢやないの。」

君江はあたりを憚らぬ松子の声に辟易して、「松子さん。その中ゆつくり会つて話させうよ。何なら、鳥渡お寄んなさいな。ドンフワンでも募集してゐるから紹介してもいいわ。」

「あすこは今幾人ゐて。」

「六十人で、三十人づゝ二組になつてゐるのよ。掃除はテーブルも何も彼も男の人がするから、それだけ他よりも楽だわ。」

「一日に幾番くらゐ持てるの。」

「さうねえ。この頃ちや三ツ持てればいゝ方だわ。」

「それで、綺麗を張つたら、かつゝねえ。自動車だつて一度乗ると、つい毎晩になつてしまふし……。」

君江はこま／＼した世智辛いはなしが出ると、他人の事でもすぐに面倒でたまらなくなる。それに又、金なんぞはだまつてゐても無理やりに男の方から置いて行くものと思つてゐるので、人込の中に隔てられたまゝ松子の方には見向きもせず、日の光に照付けられた三越の建物を眩しさに見上げながら、すた／＼四辻を向側へと横ぎつてしまつたが、少しは氣の毒にもなつて、後を振り返つて見ると、松子は以前の処に立止つたまゝ、挨拶のしるしに遠くから鳥渡腰をかゞめ、それでどう安心したといふ風で、これも忽ち人通りの中に姿を没した。

二

松屋呉服店から二三軒京橋の方へ寄つたところに、表附は四間間口の中央に弧形の広い出入口を設け、その周囲にDONJUANといふ西洋文字を裸体の女が相寄つて捧げてゐる漆喰細工。夜になると、此の字に赤い電氣がつく。これが君江の通動してゐるカツフエであるが、見渡すところ殆ど門並同じやうなカツフエばかり続いてゐて、うつかりしてゐると、どれがどれやら、知らずに通り過ぎてしまつたり、わるくすると門ちがひをしないとも限らないやうな氣がするので、君江はざつと一年ばかり通ふ身でありながら、今だに手前隣の眼鏡屋

と金物屋とを目標にして、その間の路地を入るのである。路地は人ひとりとやつと通れる程狭いの、大きな芥箱が並んでゐて、寒中でも青鯛が翼を鳴し、昼中でも鰻のやうな老鼠が出没して、人が来ると長い尾の先で水溜の水をはね飛す。君江は袂をおさへば足して十歩ばかりやがて裏通を行く人の顔も見分けられるあたり。安油の悪臭が襲ふやうに湧き出してくる出入口をくぐると、何処といふ事なく電虫のぞろぞろ這ひ廻つてゐる料理場である。料理場は後から建て増したのらしく、銀座通に面した表附とはちがつて、震災当時の小屋同然、屋根も壁もトタンの海鼠板一枚で囲つてあるばかり。それでも土間から急な梯子段を土足のまゝ登つて行くと、十畳ばかり畳を敷いた一室があつて、四方の壁際ぐるりと四十五台ばかりも鏡台が並べてある。丁度三時五六分前。十畳の一室は、朝十一時から店へ出てゐた女給と、今方来たものとの交代時間で、坐る場所もない程混雑してゐる最中。鏡一台の前にはいづれも女が二三人づゝ繡眼押しに顔を突出して、白粉の上塗をしたり髪を直したり、或は立つて着物を着かへたり、大胡坐で足袋をはき替へたりしてゐるものもある。

君江は堅シボの一重羽織をぬいで肩掛と一つにして風呂敷に包んだ。そして廊下への出口に置いてある衣裳棚に、名前の貼紙がしてある処を見て其の包を載せ、コンバクトで鼻の先を叩きながら、廊下づたひにパンツリイを通り抜けると、丁度店二階の方から歩いて来る春代といふ女に出逢つた。帰り道が同じ四谷の方角なので、六十人ある朋輩の中では一番心安くなつてゐる。

「春さん。昨夜はグレたんぢやないの。後で何かおごつてよ。」

「それアあなたでせう。わたし随分待つてゐたのよ。今夜はきつと一緒に帰りませう。其の方が経済だからねえ。」

君江は其のまゝ表二階の方へ行きかけると、階段の下から足番をしてゐる男ボーイが、「君江さん、電話です。」と頻に呼んでゐる声が聞えた。

「はアイ。」と大声に答へながら、口の中で「誰だらう。いけすかな

い。」とつぶやきながら、テーブルや植木鉢の間を小走りに通り抜けて階段を下りて行つた。

階下は銀座の表通から色硝子の戸をあけて入る見通しの広い一室で、坪数にしたら三四十坪程もあらうかと思はれるが、左右の壁際には衝立の裏表に腰掛と卓子とをつけたやうなボックスとか云ふものが据ゑ並べてあつて、天井からは挑灯に造花、下には椅子テーブルに植木鉢のみならず舞台で使ふ敷畳のやうな植込が置いてあるので、何となく狭苦しく一見唯ごた／＼した心持がする。正面の奥深い片隅に洋酒を棚に並べた酒場があつて、壁に大きな振り時計、その下に帳場があり、続いて硝子戸の内に電話機がある。君江は行きちがふ人毎に笑顔をつくりながら、電話室へ駆け込み、「もし／＼どなた。」ときくと、電話は君江を呼んだのではなく、清子といふ女給の聞きちがへであつた。

爪先で電話室の硝子戸を突きあけ、「清子さん。電話。」と呼びながら君江は反身に振返つてあたりを見廻したが、昼間のことで客はわづかに二組ほど、そのまはりには女給が七八人集つてゐるばかり。植木の葉かけを透して見ても清子の姿は見えない。誰やらが「清子さんは早番でせう。」と云ふ。君江はその通り電話の返事をして硝子戸の外へ出ると、其の姿を見て、洋服をきた中年の瘦せた男が帳場の台に身を倚せたまゝ、「君江さん。」と呼留めて、「どうしました。占ひは。」

「たつた今、見て貰つたわ。」

「どうでした。やつぱり男のおもひでせう。」

「それなら見てもらはなくつても覚えがある筈ぢやないの。もうそんな景気ぢやないわ。小松さん。わたし大に悲観してゐるのよ。」

「へえ。君江さんが……。」と小松と云はれた男は円顔の細い目尻に皺をよせて笑ふ。年はもう四十前後。神田の何とやら云ふダンスホールの会計に雇はれてゐる男で、夕方六時に出勤する頃まで、毎日懇意なカツエーを歩き廻つて女給の貸間をはじめ、質屋の世話、芝居の切符の取次など、何事にかぎらず女の用を足してやつて、皆から小松

さん小松さんと重宝がられるのを此の上もなく嬉しいことにしてゐる男である。いや味な事は言はないかはり、お客になつて飲み食ひもした事がない。以前はどこかの箱屋だともいふし役者の男衆だつたといふ噂もある。君江はこの男から日比谷の占者のことをきいたのである。

「君江さん。どうでした。何か手がかりがありましたか。」

「さア。何だか、いろ／＼事を言はれたけれど、何の事だかわけがわからないのよ。わたしの方でも別に何ともきいては見なかつたんだけれど。」

「それぢや駄目だ。君江さんと来たら実にのん気だからな。」

「壹円損したわ。」と君江は人に問はれて始めて占者の判断の甚要領を得てゐなかつた事と、自分のき／＼方も随分不熱心であつた事に心づいた。最少し尙の困るくらゐ委しくこまかい事まできけばよかつたといふ気がした。

「でもねえ、小松さん。当分今の通りで別条はないんですとさ。覚えてゐるのはそれツきりよ。いろ／＼な事を言はれたけれど『何が何だかわからないのヨ』なのよ。まつたくさ。何しろ占を見てもらふのは生れて始めてせう。見て貰ひつけないと駄目なものねえ。占もやつぱり聞方があるんぢやないか知ら。」

「占ひかたはあつても、別に聞き方はないでせう。」

「それでも、お医者さまでも始めて見てもらふ時には、いろ／＼此方から言はなくつちや、いけないツて云ふぢやないの。だから占や何かでもやつぱりさうだらうと思ふわ。」

表梯子の方から蝶子といふ三十越したでつぶりした大年増が拾円紙幣を手にして、「お会計を願ひます。」と帳場の前へ立ち、壁の鏡にうつる自分の姿を見て半襟を合せ直しながら、

「君江さん。二階に矢さんが居てよ。行つておあげなさいよ。うるさいから。」

「さつき見掛けたけれど、わたしの番ぢやないから降りて来たのよ。あの人、先に辰子さんのバトロンだつて、ほんとうなの。」

「さうよ。日活の吉さんに取られてしまつたのよ。」とはなし出した時會計の女が伝票と刺銭とを出す。その時この店の持主池田何某といふ男に事務員の竹下といふのが附き随ひ、コック場へ通ふ帳場の傍の戸口から出て来る姿が、酒場の鏡に映つた。蝶子と君江とは挨拶するの面倒なので、さつさと知らぬふりで二階の方へ行く。池田といふのは五十年配の歯の出た貧相な男で、震災当時、南米の植民地から帰つて来て、多年の蓄財を資本にして東京大阪神戸の三都にカツプエーを開き、まづ今のところでは相応に利益を得てゐるといふ噂である。

表梯子から二階へ上つた蝶子は壁際のボックスに坐つてゐる二人連れの客のところへ刺銭を持つて行き、君江は銀座通を見下す窓際のテーブルを占めた矢さんといふお客の方へと歩みを運びながら、

「いらつしやいまし。この頃はすつかりお見かぎりね。」

「さう先廻りをしちやアするいよ。先日はどうも、すつかり見せつけられまして。あんなひどい目に遇つた事は御在ません。」

「矢さん。たまにやア仕方がないことよ。」と愛嬌を作つて君江は膝頭の触れ合ふほどに椅子を引寄せて男の傍に坐り、いかにも懇意らしく卓の上に置いてある敷島の袋から一本抜取つて口にくはへた。

矢さんといふのは赤阪溜池の自動車輸入商会の支配人だといふ触込みで、一時は毎日のやうに女給のひまな昼過ぎを目掛けて遊びに来たばかりか、折々店員四五人をつれて晩餐を振舞ふ。時々これ見よがしに芸者をつれて来る事もある。年は四十前後、二ツはめてゐるダイヤの指環を抜いて見せて、女達に品質の鑑定法や相場などを長々と説明するといふやうな、万事思切つて歯の浮くやうな事をする男であるが、相応に金をつかふので女給連は寄つてたかつて下にも置かないやうにしてゐる。君江は既に三度芝居の切符を買つたこともあるし、休暇時間に松屋へ行つて羽織と半襟を買つたこともあるので、この次どこか御飯でも食べに行かうと誘はれれば、其先は何を言はれても、さう情なく振切つてしまふわけにも行かない位の義理合ひにはなつてゐる。それ故矢さんからひやかされたのを、なまじ胡麻化す

よりも明さまに打明けてしまつた方が、結句面倒でなくてよいと思つたのである。矢さんは内心むつとしたらしいのを笑ひにまぎらせて、「兎に角、義しかつたな。罪なことをするやつだよ。」とテーブルの周囲に集つてゐるお民、春江、定子など三四人の女給へわざとらしく冗談に事寄せて、「お二人でお揃ひのところを後からすつかり話をきいてしまつたんだからな。人中なのにも手も握つてゐた。」

「あら。まさか。そんなにいちや／＼したければ芝居なんぞ見に行きやアしないわ。わきへ行くわよ。」

「こいつ。ひどいぞ。」と矢さんは撲つまねをするはずみにテーブルの縁に在つたサイダアの壺を倒す。四五人の女給は一度に声を揚げて椅子から飛び退き、長い袂をかへるばかりか、テーブルから床に滴る飛沫をよける用心にと裾まで摘み上げるものもある。君江は自分の事から起つた騒ぎに拠所なく、雑巾を持つて来て袂の先を口に啣へながら、テーブルを拭いてゐる中、新しく上つて来た二人連の客。いらつしやいまして大年増の蝶子が出迎へて「番先はどなた。」と客の注文をきくより先に当番の女給を呼ぶ金切声。「君江さんでせう。」と誰やらの返事に君江は雑巾を植木鉢の土の上に投付けて「はアい。」と言ひながら、新米のお客の方へと小走りにかけて行つた。

客は二人とも髭を生した五十前後の紳士で、松屋が三越あたりの帰りらしく、買物の紙包を携へ、紅茶を命じたまゝ、女給には見向きもせず、何やら真面目らしい用談をしはじめたので、君江は却てそれをよい事に、ひまな女達の寄集つてゐる壁際のボックスに腰をかけた。テーブルの上には屑羊羹に塩煎餅、南京豆などが、袋のまゝ、新聞や雑誌と共に散らかし放題、散らかしてゐるのを、女達は手先の動くがまま摘んで口の中へと投げ入れてゐるばかり。活動写真の評判や朋輩同士の噂にも毎日の事でもう飽きてゐる。睡氣がさしても流石こゝでは居睡りをするわけにも行かないらしく、いづれも所業なげに唯時間のたつのを待つてゐるといふ様子。其の時隅の方でひとり雑誌の写真ばかり繰りひろげて見てゐた女が、突然、

「アラ、実にシャンねえ。清岡先生の奥様よ。」といふ声に、ボックスに休んでゐた女は一斉に顔を差出した。君江も屑羊羹を頬張りながら少し及腰になつて、

「どれぞ。見せてよ。わたしまだ知らないんだからさ。」

「はい。よく御覧なさい。」と以前の女が差付ける雑誌の挿絵。見れば、縁側に腰をかけてゐる夫人風の女の姿で、「名士の家庭。」「創作家清岡進先生の御夫人鶴子さまのお姿。」としてあつた。

「君江さん。あなた、何ともない事。そんなもの見て。わたしなら破いてしまひたくなるわ。」と写真の上に南京豆を打ちつけたのは、もと齒医者の妻で生活難から女給になつた鉄子である。

「あなた。随分焼餅やきねえ。」と君江は却て驚いたやうに鉄子の顔を見返して、「いゝぢやないの。奥様なら奥様で。気にしないだつて。」

「君江さんは全く徹底してゐるわ。」とダンス場から転じてカツフェーに來た百合子といふのが相槌を打つと、もとは洋髪屋の梳手であつた瑠璃子といふのが、

「兎に角一番幸福なのは清岡さんよ。令夫人はシャンだし、第二号は銀座に於ける有名な女給さんだし……。」

「ちよいと何が有名なのさ。止して頂戴よ。」と君江はわざとらしく憤然と椅子を立つて、先刻から打捨て置いた自動車商會の矢田さんの方へと行つてしまつた。女達は無論戯れとは知りながら、少し心配したやうに齊しく其の後姿を見送つたが、瑠璃子ももと／＼梳手の時分ない／＼私娼窟に出没して君江とも一二度言葉交へた間柄。偶然このカツフェーで邂逅しても、互に緊契する処があるらしく秘密を守り合つてゐるくらゐなので、何を言つても又言はれても互に氣を悪くする筈はないと、平氣な顔で、折からテーブルを叩くらしい音がするのを聞きつけ、自分が持参の客ではないかと、音する方へ目を注ぐ。丁度其の途端、階段から上つて来る新しい客の洋服姿が向の壁の鏡に映つたのを早くも認めて、「アラ清岡先生よ。」と瑠璃子は小声で一同

に知らせた。

「先生。くしやみが出なかつて。」と君江とは仲の好い春代が逸早く駈寄つて、「あつちのボツクスがいゝわよ。」と洋服の袖に縋り、人目につかない隅のボツクスへ連れて行つた。これは君江を張りに来る自動車屋の矢田さんが、まだ帰らずにあるので、万一の事を用心した春代の心づかひである。

「歩いて来るともう暑い。黒ビールか何か貰はうよ。」と清岡進は抱へてゐた新刊雑誌と新聞紙とをテーブルの下に掲板に押入れ、新しい鼠色の中折帽をぬいで造花の枝にかけた。紺地二重ボタンの背広に蝶結のネクタイ。年の頃は三十五六。鼻先と頤のとがつてゐるのが目に立つので、色の白い眼の大きい頬のこけた顔立は一層神経質らしく見えるのに、長く伸ばした髪をわざと無造作に後に掻き上げてゐる様子誰が目にも新進の芸術家らしく、また宛然活動写真中に現れて来る人物らしくも見える。その父は漢学者だとかいふ事であるが、清岡は仙台あたりの地方大学に在学中も學業の成績は極めて不出来で、卒業の後文學者の仲間入はしたものの、つい三四年ほど前までは、更に月旦に登るやうな著述もなかつた。然るに、何から思ひついたのやら、ふと曲亭馬琴の小説夢想兵衛胡蝶物語を種本にして、原作の紙鸞を飛行機に改め、「彼はどこへでも飛んで行く。」といふ題をつけ、全篇の趣向をそのまゝ現代の世相に当てはめた通俗小説を執筆して、或新聞に連載した。これが偶然大当りにあたつて、新派俳優の芝居や活動写真にも仕組まれ、爾來名声は藉然として、一作ごとに高くなり、今日では大抵の雑誌や新聞に清岡進の名を見ないものはないやうな勢になつた。

「これも先生の御本。」と春代は遠慮なくテーブルの上の一冊を取り上げ口絵を見ながら、「これはまだ活動にはならないんでせう。」

清岡はわざとさうな顔をして、「春さん。鳥渡電話を掛けてくれ。丸田新聞の編輯局に村岡がある筈だから。京橋の丸九番だよ。呼出してすぐにこゝへ来いッて。」

「村岡さんて、いつもの村岡さん。」

「さうだよ。」

「京橋の丸九番だわね。」と春代が行きかけた時、持番の定子といふのが、黒ビールと南京豆の小皿を持つて来て、酌をしながら、「わたし、先生の小説には思出の深い事があるのよ。あの時分、別に役も何も付いた訳ぢやないけれど、始めて蒲田へ還入つたのよ。」

「定さん。蒲田にゐた事があるのか」と清岡はコップを片手に定子の顔を斜に見上げながら、「どうして止したんだ。」

「どうしてッて。見込みがないんですもの。」

「お世辞ぢやないが、定さんのやうな顔立なら映画には向くんだがね。監督の言ふ事を聴かないからだらう。女は何になつても男の後援がなくつちや駄目だからな。女流作家だつて少し売出すまでには、みんな背景があるんだよ。」

その時君江が巻煙草を啣へながら歩いて来て、黙つて清岡の側に腰をかける。春代が戻つて来て電話の返事を伝へ、そのまゝ腰をかけて、「先生。何か御馳走してよ。君ちゃんは。」

「わたし此の方がいいわ。」と清岡が飲残した黒ビールのコップを取上げた。

「おむつまじい事ね。ぢやア、春代さん、チキンライスか何か一緒にたべませう。」と定子は帯の間から取出す伝票紙に注文の品を書きながら立つて行つた。

明り取りの窓にさしてゐた夕日の影はいつか消えて、階段の下から突然蓄音機が響き出した。これが五時半になつた知らせで、三時過から休んでゐた女給も化粧をし直して出てくる。階上階下の電燈には残りなく灯がついて、外はまだ明い夏の夕方も建物の内ばかりは早くも夜の景気である。

三

帰り途が同じ四谷の方角なので、君江と春代とは大抵每晚連立つて

数寄屋橋あたりから円タクに乗る。銀座通では人目に立つのみならず、其辺にはカツエーを出た酔客がまだうろ／＼徘徊してゐるので、これを避けるため、少し歩きながら、通過る円タクを呼び止め、値切る上にも賃金を値切り倒して、結局三十銭位で承知する車に乗るのである。其晩二人は数寄屋橋を渡つてガードの下を過ぎ、日比谷の四辻近くまで来たが、三十銭で承知する車は一台もない。春代は腹立しげに、「何だい。馬鹿にしてゐる。停るかと思つたら、あいつも行つてしまつた。」

「いゝわよ。ぶら／＼歩きませうよ。少し酔つたから丁度いゝわよ。」
「もうすつかり夏だわねえ。御堀の方を見ると、まるで芝居の背景見たやうねえ。」

日比谷の四辻には電車を待つ人がまだ大分立つてゐる。

「今夜は節約して電車に乗らうよ。」

二人は道幅のひろい四辻を歩道から線路の方へと歩み寄らうとした時、横合ひからぬつと二人の前へ立ちふさがつた洋服の男があつたので、二人はびつくりして其の顔を見ると、今日も午後にはカツエーへ来てゐたダイヤモンドの矢田さんであつた。

「まア、大変御ゆつくりねえ。どこで飲んでいらしたの。」

「送つてあげやう。」と矢田は円タクを呼びかけた。

「わたし、電車でいゝのよ。お客様と自動車に乗るのはやかましから。」と春代は体よく逃げやうとすると、矢田は、度々その手をつてゐると見えて、

「それア銀座通のことぢやないか。こゝまで来れば構やせむ。僕が責任を負ふ。」

「あなたも節約して電車になさいよ。矢さん。」と君江は丁度来かゝつた赤電車の方へとすた／＼行きかけたので、矢田は兎や角言つてゐる暇もなく、二人の後について新宿行の電車に乗つた。

案外すいてゐる車の中には、二人の知らない他の店の女給が三人ばかりに、男が五六人。いづれも居眠りをしてゐる。半蔵門を過ぎて四

谷見附に来かゝる時まで、矢田はさすがにおとなしく、連れではないやうな風をして口もきかずにゐたが、君江が春代を残して一人車から降りかけるのを見るや否や、あわてゝ其の後について来て、

「君江さん。もう乗換はないぜ。自動車を呼ばう。」

「いゝのよ。すぐ其処ですから。」と君江は人通の絶えた堀端を本村町の方へと歩いて行く。円タクの運転手が二人の姿を見て、窓から手を出し指で賃金の割引を示すものもあれば、垢じみた顔を出してひやかすものもある。矢田はびつたり寄添ひ、

「君江さん。どうしても家へ帰らなくつちやいけないのか。一晚ぐるむ都合できないのか。エ、君江さん。どうしてもいけないければ、一時間でも、三十分でもいい。話をしてすぐ別れてもいいから、鳥渡つき合つてくれ。僕はそんな無理なことは決して言はない。今夜の中にきつと帰すから。」

「もう晩すぎるわよ。ぐづ／＼してゐると、わたし帰れなくなつてしまふから。それに明日は早番だから。」

「早番だつて、あすこは十一時ぢやないか。こんな事を言つてぐづぐづしてゐる中に時間がたつてしまふぢやないか。この近辺はいけないのか。荒木町か、それとも牛込はどうだ。」と矢田は君江の手を握つて動かない。

土手上の道路は次第に低くなつて行くので、一歩ごとに夜の空がひろくなつたやうに思はれ、市ヶ谷から牛込の方まで、一目に見渡す堀の景色は、土手も樹木も一様に蒼く霧のやうにかすんでゐる。そよそよと流れて来る夜深の風には青くさい椎の花と野草の匂が含まれ、松の聳えた堀向の空から突然五位鷺のやうな鳥の聲が聞えた。

「アラ。何だか田舎へ行つたやうねえ。」と君江は空を見上げた。矢田はすかさず、

「どこか静な処へ行かうぢやないか。一晚位犠牲におしよ。僕のため。」

「矢さん。もしか目付かつて、ごた／＼したら、あなた。あの人の代